

アドベントの二本目のキャンドルは「天使（御使い）のキャンドル」と呼ばれ、それは「平和」を表わします。今日の箇所ではイエスがお生まれになった夜、御使いと共に天の軍勢が「いと高きところに、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」と賛美したことからきています。「天の軍勢」も加わってということですから、それは幾千万の御使いの大合唱だったことなのでしょうね。ご存知の方も多いと思いますが毎年12月第一日曜日、つまり今日ですが「一万人の第九」という催しがあり、そこでベートヴェンの第九交響曲が演奏され、「歓喜の歌」の合唱があります。今年はコロナ禍の影響でプロ歌手4人と40人の合唱団で歌われるということになっているそうです。今年は例外ですがたとえ毎年一万人以上による大合唱であったとしても、天の軍勢と御使いたちの大々合唱に比べればちっぽけなものに見えるのではないかと思います。

「いと高き所に、栄光が、神にあるように」という賛美は、救い主の誕生にふさわしい賛美です。神は、もとから栄光に満ちたお方ですが、救い主を通して、さらに大きく、豊かな栄光をお受けになります。私達人間は賛美によって神の栄光をたたえ、それを表わし、その栄光に与かるために造られました。しかし、人は神に背を向け、神をたたえるどころか、自らを神にまつりあげ、神にとってかわって世界を支配しよう、コントロールしようとしてきました。他人事ではありません。それと同じことは、私たちの身近に、いや私たち自身の中にもあります。自分が中心でなければ気が済まないこと、思いどおりにならないとわめき散らすこと、何事にも首をつっこんで人をコントロールしたがること、他の人が誉められるとそれを妬むことなどに、神のみこころを悲しませる罪があります。こうした罪は、それが見えるか見えないか、大きい小さいかに関わりなく、世界に戦争と不安を、社会に不正と不公平を、家庭に亀裂と破壊を、個人に虚しさや不安をもたらしてきました。ただ覚えておく必要があるのは神が、そのように世界を裁き、人類を滅ぼしてしまわれたとしても、神の栄光は少しも損なわれることはないということです。むしろ神は罪を取り除くことにおいて大きな栄光をお受けになるということも言えるのです。神はそれぐらい偉大で聖いお方であるということがはっきりするわけですから。

しかし、神は罪とともに人間が取り除かれることを望まれません。神は人を愛して、罪の中から人を救い出す道を選ばれたのです。そして、そのために、ご自分のひとり子を救い主として、この世に遣わしてくださいました。救い主は人の罪を背負い、人類の身代わりとなって、ご自分の身に神のさばきを引き受けてくださいました。救い主はご自分がさばきを受けることによって人の罪を赦し、ご自分が命を捨てることによって、信じる者に永遠の命を分け与えてくださったのです。神がして下さったことは神にとっては人間的な表現をするなら何のメリットもないことです。むしろ犠牲ばかりで何の得にもありません。しかし神は、救い主イエス・キリストによって、この世に愛を届けてくださいました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ヨハネ 3:16 と書かれている通りです。これはこの世のどこにもない愛です。人はこの愛によって救われるのです。

すべての人は、神に造られた者として神の栄光をたたえることができます。しかし、イエス・キリストが私の罪のために命を投げ出してくださいましたことを知り、信じる者は、造られた者としてだけでなく、イエス・キリストの十字架の血で、罪から買い戻された者、つまり、贖われた者として、より豊かに神をほめたたえることができるようになるのです。教会の礼拝に集い、一緒に神への賛美を歌っておられる方々が一人残らず、イエス・キリストをご自分の救い主、また主として、その心に、生活に、人生に迎え入れ、

キリストによって示された神の愛のゆえに、より大きく、豊かに神の栄光をほめたたえることができますようお願い、このクリスマスがその時となるよう祈っています。

「神に栄光あれ」と歌った御使いは、続いて「地に平和があるように」と歌いました。「栄光」が救い主によって明らかにされた栄光となったように、この「平和」もまた、救い主によって与えられる平和をさしています。これはスローガンではありませんし、キャッチコピーでもありません。イザヤ9:6に「その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる」とあります。「平和の君」の「君」とは王、君主つまり最高の権威と権力を持っている人のことを言います。キリストは平和に関して最高の権威と権力を持っているお方であり、別の言い方をするならこのお方イエス・キリストのみ平和をもたらすことができるということです。

イエスがお生まれになった時代はローマ帝国が世界を支配していた時代です。ローマは様々な国々を征服・吸収し、地中海世界に大きな帝国を築きあげ、その地域は長い間平穏を保ちました。イエス様が生まれる20年ほど前から約200年間は「パックス・ローマナ」（ローマの平和）と呼ばれ、ローマ皇帝は自らを人々に平和をもたらす「救い主」と呼んでいました。「ローマの平和」と聞くと何となくその時代は穏やかで平和がみなぎっていたように思います。しかし、実際「ローマの平和」とはローマが他の国々を力づくでねじ伏せた上に成り立っていた平和にすぎず、属国や植民地では人々は大きな苦しみを味わっていました。福音書に出てくるようにユダヤの国はローマ帝国によって虐げられていました。特にこの時期はクリスチャンが迫害を受けていたのです。キリスト教がローマ帝国の国教となるのはずっと後のことです。つまりローマの平和と言っても恐怖と圧迫による支配によってもたらされたもので、決して人々に本物の平和を与えなかったのです。本物の平和、平安はただおひとり、まことの救い主、平和の君であるイエス・キリストだけが、もたらすことができるのです。

ではキリストの平和はどのように私たちにもたらされるのでしょうか？ キリストによって与えられる平和は、まず、人の心に「平安」となって宿ります。イエスは弟子たちに約束されました。「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」ヨハネ14:27 弟子たちは、イエスに従い、イエスを宣べ伝えたために、大きな苦しみに遭いましたが、その中にもあっても、心の平安を失くしませんでした。使徒パウロは「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」ペリピ4:6-7と教えました。それは、状況や環境に左右されない心の平安です。神を信じて祈ることによって得られる確かなものです。私たちの人生には、思い煩わずにはいられないこと、不安を覚えぬにはおれないことが必ず起こります。そんな中でも、神の平安が私たちの心と思いをキリストによって守ってくれるというのです。信じて祈る者には、こんな素晴らしい約束があるのです。ですから、私たちはどんなに思い煩うようなことがあっても、感謝をもって捧げる祈りを忘れないのです。

ところで英語で温度計のことをサーモメーターと言い、温度調節器のことをサーモスタットと言います。サーモメーターとサーモスタット、名前は似ていても働きは大きく違ってきます。サーモメーター（温度計）は気温が上がれば上がり、気温が下がれば下がります。部屋の気温を表示するだけです。個人でも熱があれば高くなり、無ければ低くなります。しかし、サーモスタット（温度調節器）は気温が上がれば冷房を動かして部屋の気温を下げ、気温が下がれば暖房を動かして部屋の気温を上げます。サーモ

メーター型（温度計型）の人は、大変なことがあるからといって心配し、嫌な目にあったからといって怒り、ものごとがうまくいかなかったからといって落ち込みます。けっきょくは回りの状況に左右されているだけです。しかし、サーモスタット型の人は違います。火のような苦しみが襲いかかっても、静かにそれを耐え、人々を励ましていきます。まわりが冷たい雰囲気になっても、そこを温めていきます。何故それが出来るかと言えば、まわりのものに左右されない、神が与えてくださる平和、キリストが与えると約束された平安を持っているからです。私たちも信仰と祈りによってこの平安を持ち続けたいと思います。

神の平和は、また、人生に意味と目的を与える平和です。ルカの福音書には、御使いが歌った「平和の歌」のほかに、シメオンが歌ったもうひとつの「平和の歌」があります。母マリヤとヨセフが生後40日目に赤ちゃんのイエスを神に捧げるために神殿にやってきた時のことです。長い間救い主の到来を待ち望んでいたシメオンという人は、その赤ちゃんこそ救い主だということを示され、赤ちゃんのイエスを腕に抱いて、こう言いました。

「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」ルカ 2:29~32 生涯をかけて救い主の到来を待ち望んできたシメオンは、ついに救い主に出会い、そのお方を自分の腕の中に抱きしめることができたのです。シメオンは、人生の目的を達成したことに満足し、「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。」と歌いました。「安らかに去らせてくださる」このことばの中に神様の平安に包まれて、いつ何時召されても大丈夫と言える心備えが来ています。神が与える平和、平安は、このように人生に意味を与え、目的を与えるのです。皆さんの心の中には、そのような平和、平安が宿っているのでしょうか。世を去るときに、人生の目的を達成した満足を味わうことができるのでしょうか。

神を信じ、キリストに従うことは、自分の幸いは何一つ求めず、ひたすらに神の栄光だけを追求するというものではありません。神は、私たちが自らを注ぎ出し、自らを捧げることによって栄光をお受けになられるだけでなく、私たちが神からの平安を受け取り、それに満たされることによって、さらに栄光をお受けになるのです。神は、私たちの救いを願っておられ、救われた者がこの地にあっても、神からの平和に満たされることを望んでおられます。私たちが神にあって幸いであり、キリストにあって満たされることが神の栄光を表わすことになるのです。そのためには素直に神を信じ、キリストに従うことが必要です。シメオンの歌は「ヌンク・ディミティス」（今、私は去る）と呼ばれています。シメオンが「わたしの目が今あなたの救いを見た」と言ったように、礼拝はキリストの救いを信仰の目で見、心に平安を満たされ、再び、日々の生活に帰って行くときです。礼拝は、救い主イエスと出会うところであり、その救いを「見る」、つまり、体験するところです。礼拝は、私たちが「神に栄光あれ」と言って、神に栄光をお返しするときですが、同時に、神が「地に平和あれ」と仰ったその平和を受け取るときでもあるのです。神は私たちが何も持たないで礼拝から去ることを望んでおられません。シメオンが「地に平和」と御使いたちによって歌われた平和を受け、それを心に宿し、そこを去ったように、私達も神に栄光あれと賛美し、地に平和をと云われたキリストの平安をいただき、この礼拝からそれぞれの場所へと遣わされてゆこうではありませんか！祈ります。